

奈良時代の擬音語・擬態語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 仲美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14778

奈良時代の擬音語・擬態語

山口 仲 美

一 はじめに

今を遡ること、一三〇〇年、奈良時代の日本人が使っていた擬音語・擬態語とは、どんなものだったのか？ 次の平安時代のそれと比較することによって、奈良時代の擬音語・擬態語の語彙的な特質を追究する。これが、本稿の目的である。

手順は次のように行なう。①奈良時代の作品として残されている『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』から、当時存在していた擬音語・擬態語を抜き出して、資料とする。②平安時代の作品から擬音語・擬態語の残されやすい作品を選び、平安時代の擬音語・擬態語を抽出する。③奈良時代の擬音語・擬態語を平安時代のそれと比較することによって、奈良時代の擬音語・擬態語の性質を明らかにする。一体どんな特質が浮き彫りになるのか？

二 対象とする擬音語・擬態語

言うまでもないが、擬音語というのは、現代語で言えば「わんわん」「ごろごろ」などの外界の声や音を日本語の発音で写し取った語のこと。擬態語というのは、「きらきら」「つるり」などの外界の状態や様子をいかにもそれらしく日本語の発音で写し取った語のこと。

ここでとりあげるのは、擬音語・擬態語として最も一般的に認められている副詞として機能している場合を中心にする。たとえば、「ばたばたと走る」「きりきりと縛る」「こんもりと茂る」などの「ばたばたと」「きりきりと」「こんもりと」など。それぞれ、「走る」「縛る」「茂る」という動詞に付くことによって、動作を修飾し限定している。こういう場合を主にここでは取り扱う。

ただし、奈良時代では、現代語と違って副詞として機能している場合でも、次のように「に」をとって動詞を修飾限定していることが多い。

沫雪あわゆきの ほどろほどろに 降り敷けば 奈良の都し 思ほゆる
かも (万葉集、一六三九)

「沫雪が、うっすらうっすらと地面に降り積もると、奈良の都が思い出されるなあ」という意味。大伴旅人が、大宰府に赴任している時の歌。雪の薄く降り積もった様子をみて、帰京の念にさいなまれているのである。擬態語「ほどろほどろ」は、「と」ではなく、「に」をとって副詞の役目を果たしている。むろん、次の平安時代から一般化していく「と」をとる場合もあるが、多くはない。これについては、別稿で詳しく触れることにし、ここでは「に」をとって文に参加する場合が、奈良時代の一つの勢力をもったパターンであったことだけをおさえておきたい。

なお、用例の少なさを補う意味から、「さばめく」「かかなく」「そそ茅原」のように、明らかに「さば」「かか」「そそ」などという擬音語・擬態語部分が抽出できる場合も、擬音語・擬態語の資料として加えた。

では、早速、どんな擬音語・擬態語が奈良時代には見られるのか、調査結果を示してみよう。

三 どんな擬音語・擬態語が見られるのか

『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』から、擬音語・擬態語を抽出すると、次に示すような六十五種類の語が抽出される^①。それを五十音順で列挙してみる。

まず、一語ごとに、仮名で語例を示し、次に()に入れて原文の表記を記す。その次に、意味を記し、最後にその語の出てくる作品名を示してある。作品名の下には、その語の現われる場所(地の文か会話文か歌謡か割注か)を示した。『万葉集』に限っては、すべて歌にのみ出現するので、特に記すことはしない。なお、以下、用例の引用は、すべて漢字かな交じり文に直して示す。必要な場合のみ、()に入れて原文を表記する。

また、擬音語・擬態語が文に参加する時に、「に」をとっているか、「と」をとっているかを、万葉仮名などで原文に表記していることがある。それらが記されている時には見出し語・原文表記の該当箇所^②にそれを記し、傍線を付した。原文には表記されていないけれど、他の文献から文に参加する時の形が明らかの場合も、見出し語にそれを記し、傍線を付しておくことにする。

奈良時代の擬音語・擬態語一覧

- ① い(馬声)馬のいななく声…万葉集、播磨国風土記(地の文)
- ② うつらうつら(宇都良々々々)鮮明に見える様子…万葉集

- ③ うらうらに| (宇良宇良尔) のどかな様子…万葉集
- ④ かか| (可加) 鶯の鳴く声…万葉集
- ⑤ かくしもがもと| (如是鴨跡) カエルの鳴き声…万葉集
- ⑥ かわら| (訶和羅) 鎧に鍵が触れて鳴る音…古事記(地の文)
- ⑦ くるるに| (苦留留爾・調盪然) 物の回転する様子…日本書紀(地の文)、日本書紀(割注)
- ⑧ くれくれと| (久礼久礼登・久礼久礼等) 暗くうなだれている様子…万葉集
- ⑨ けやに| (計夜尔) 際立った様子…万葉集
- ⑩ ここ| (古々) 猿の鳴く声…常陸国風土記(割注)
- ⑪ ここと| (古胡登) 力をこめて物を揉む音…万葉集
- ⑫ こむ| (来許武) 狐の鳴き声…万葉集
- ⑬ ころくと| (許呂久等) カラスの鳴き声…万葉集
- ⑭ こをろこをろに| (許々袁々呂々邇・許袁呂許袁呂爾) 液体を矛でかき回す音…古事記(地の文)、古事記(歌謡)
- ⑮ さば| (佐麼・訕叱) 騒がしい音…日本書紀(地の文)、日本書紀(割注)
- ⑯ さやに| (清尔・佐夜尔) 笹の葉ずれの音・目に鮮やかな様子…万葉集
- ⑰ さやさや| (佐夜佐夜・佐柳佐柳) 木の枝のこすれあう音・海藻が波に揺れる音・琴の音…古事記(歌謡)、日本書紀(歌謡)
- ⑱ さらさらに| (更更・佐良左良尔) 川に布をさらす音・杉の葉ずれの音…万葉集
- ⑲ さわさわに| (佐和佐和邇・佐和佐和珥) 大根の葉ずれの音・立派な鱸を引き寄せ上げる音・騒がしい音・さわやかな様子…古事記(会話文)、古事記(歌謡)、日本書紀(歌謡)
- ⑳ さるさる| (狭藍左調) 衣装が触れ合ってたてるざわめきの音…万葉集
- ㉑ さゑさゑ| (佐恵佐恵) 衣装が触れ合ってたてるざわめきの音…万葉集
- ㉒ しのに| (之努尔・思努尔) 心がうち萎れる様子・ひたすら相手を思う様子…万葉集
- ㉓ しののに| (之努々尔・小竹野尔) 全身が水を浴びたように濡れている様子・涙で濡れている様子…万葉集
- ㉔ しほほに| (志保々尔) 涙に濡れた様子…万葉集
- ㉕ しみに| (思美三荷・志弥美尔・繁森・四美見似) 隙間もないほど生い茂ったり、物や人が詰まっている様子…万葉集
- ㉖ しみらに| (之弥良尔) 空きもなく満たされている様子…万葉集
- ㉗ すくすくと| (須久須久登) 勢いよく進んでいく様子…古事記(歌謡)
- ㉘ すぶすぶ| (須々夫々) すばまって狭い様子…古事記(会話文)
- ㉙ そそ| (彼彼) 茅の風に鳴る音…日本書紀(会話文)
- ㉚ そよと・そよに| (曾与等・衣世二) 箭や枕が共鳴する音…万葉集
- ㉛ たしだしに| (多志陀志爾) 笹が笹の葉を打つ音…古事記(歌謡)
- ㉜ たゆたに| (絶谷) 不安と安らぎの間で揺れ動く様子…万葉集

四 万葉集に最も多く残存

以上の六十五種類が、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』に出現する擬音語・擬態語である。最下欄に記した擬音語・擬態語が出現する作品を眺めると、日常会話語に近い言葉で綴られている作品ほど擬音語・擬態語が頻出していることが分かる。『万葉集』に、四十八種の擬音語・擬態語がみられ、全体の七割強を占めている。むしろ、『万葉集』は歌集だから、日常会話語そのものではない。でも、『古事記』『日本書紀』『風土記』のような、漢文や漢式和文(二変体漢文)で書かれた作品よりは、遙かに日常会話語に近い。

『古事記』『日本書紀』『風土記』の三作品合わせても、擬音語・擬態語は十八種しか出現しない。さらに、『古事記』『日本書紀』『風土記』を比べると、漢式和文の『古事記』『風土記』の方が、漢文の『日本書紀』よりも、擬音語・擬態語を含む比率が高い。漢文よりも漢式和文の方が日常会話語を含みやすい文章だからである。擬音語・擬態語は、日常会話語で最も活躍する言語なのである。その証拠に、『古事記』『日本書紀』『風土記』に僅かに見られる「会話文」には、次のように、すかさず擬音語・擬態語が出現している。

鼠、来て云いひしく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」(古事記、上巻)

オホナムチノカミが火に囲まれて逃げ道を失っていると、鼠が出てきて教えた、「内はほっかり、外はきちまち」と。それで内に向かうと穴がありそこに入って一命をとりとめたという話。「ほらほら」は、空洞になっている様子を表す擬態語。「すぶすぶ」は、狭い様子を表す擬態語。こんなふうに関日常会話語を使った会話文がたくさん含まれている作品が残されていたら、擬音語・擬態語は、倍増していたに違いない。

「一覽」に掲載された擬音語・擬態語は、当時の人々が日常会話で使っていた言葉が、氷山の一角のように、後世のわれわれの前に残されているものである。『万葉集』のような歌集に最も多くの擬音語・擬態語が残されているために、時には偏りのある現象を呈している可能性については、意識しておく必要がある。

だが、馬のいななく声①「い」のように、『万葉集』にも、『播磨国風土記』にも見られる語があることを考えると、『万葉集』にしか見られない語であっても、存外一般に使われていた語と考えるてもよいのかもしれない。現に、後述するように、平安時代に継承された擬音語・擬態語のうち、『万葉集』にしか見られなかった語の多くが平安時代の散文作品で使用されている。だから、『万葉集』にのみ見られた擬音語・擬態語でも、歌集特有のものである場合はさほど多くはないということである。いいかえれば、奈良時代に一般的に使われていた語を『万葉集』が多く取り入れていると考えても、さほど大きな誤りを犯さないであろうということである。

さて、これらの奈良時代の擬音語・擬態語を平安時代のそれと比

較すると、どのようなことが明らかになるのか。

五 平安時代の擬音語・擬態語

平安時代の擬音語・擬態語は、同時代成立の二十七作品と辞書二点を調査して抽出した^②。調査に使った作品・辞書は以下に示すとおりである。擬音語・擬態語の出現しやすい仮名文や漢字かな交じり文で書かれた作品が中心である。平安時代に作られた辞書にも、少数ではあるが、擬音語・擬態語が掲載されているので、調査資料に含めておいた。

● 調査した平安時代の作品：『竹取物語』『うつつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『伊勢物語』『大和物語』『篁物語』『平中物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』『枕草子』『大鏡』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『三宝絵詞』『今昔物語集』『法華百座法談聞書抄』『打聞集』『古本説話集』

● 調査した平安時代の辞書：『類聚名義抄』『色葉字類抄』

さて、これらの資料には、合計百三十六種類の擬音語・擬態語が見られた。次に列挙するとおりである。ただし、ここでのメインテーマは奈良時代の擬音語・擬態語であるので、平安時代のそれは、語例だけを五十音順に掲げ、後の記述のための参考に資することにした。

あざあざと、いうと、いがいがと、うつらうつらと、うらうらと、えぶえぶと、おいおいと、おほおほと、かかと、がさと、がはがはと、かひよと、からからと、かりかりと、かりと、きしきしと、きだきだ、きと、行と、きよきよと、きらきらと、きらと、きるきると、くくと、くたくたと、くだくだと、くつくつと、くるくると、くれくれと、けざげざと、こうこうと、こそこそと、ごそごそと、こそると、こほこほと、こほると、ささと、さださだと、さと、さはさは、ざぶざぶと、ざぶりざぶりと、さめざめと、さやさやと、さらさらと、しうしう、しかしかと、ししと、しづしづと、しとと、しとどに、しどろもどろに、しほしほと、しめじめと、すがすがと、すくすくと、そよそよと、そよと、そよりそよと、そよると、たがたが、たそたそと、たはたは、たわわに、たをたをと、ちうと、ちちよちちよと、ちよちよと、つだつだと(に)、つづりさせ、つと、つふつふと、つぶつぶと、つぶと、つぶりと、つやつやと、つらつらと、どうと、どろどろと、どろに、とををに、なよなよと、にここに、にふぶに、ねうねうと、のどのどと、はくと、はくりと、はたと、はたはたと、はたりはたりと、はらはらと、ひしと、ひしひしと、ひたと、ひたひたと、びちびちと、ひとくひとくと、びよと、ひよひよと、ひらひらと、ふさふさと、ふたと、ふたふたと、ふつと、ふつふつと、ふつりと、ふと、ぶぶと、ふりふりと、ほうと、ほうほうと、ほがらほがらと、ほとと、ほとほとと、ほのほのと、ほほと、ほろほろと、

ほろろと、みしみしと、むくむくと、むむと、めらめらと、やちよと、やはやはと、やれやれと、ゆくゆくと、ゆさゆさと、ゆたのたゆたに、ゆぶゆぶと、ゆらゆらと、ゆるゆると、よいぞよいぞと、よよと(に)、よると、わなわななど。

先に掲載した奈良時代の六十五種類の擬音語・擬態語は、平安時代の百三十六種類の擬音語・擬態語にどの程度一致しているのだろうか。一致している語は、平安時代まで継承された語である。一致しない語は、平安時代には別の語に取って代わられたか、あるいは、奈良時代だけに使われた可能性の高い語である。最後の奈良時代だけに存在していた擬音語・擬態語こそ奈良時代らしさを現わすであろう重要な語彙である。

六 平安時代までは残った語

奈良時代の擬音語・擬態語が、平安時代のそれとどの程度一致しているのかを検討しようとすると、ただちに問題にぶつかる。語形そのものは同じなのだけれど、意味が全く異なる擬音語・擬態語が出てくるからである。奈良時代の④「かか」、⑧「くれくれ」、⑨「つらつら」である。

たとえば、⑧「くれくれ」は、奈良時代では、次のように使われている。

常知らぬ 道の長手を くれくれと いかにか行かむ 糧はなしに (万葉集、八八八)

「行き馴れない遠い旅路を、とぼとぼとどのようにして行けばいいのか、食糧もなくて」といった意味。「くれくれ」は、暗い気持ちでうなだれている様子を表す。ところが、平安時代の「くれくれ」は、籠に縄を結わえ付けてそれを手際よく下におろす様子に用いられている。現在なら「くるくる」がしっくりしそうな意味なのである。両時代の「くれくれ」は、意味が全く異なっており、同一語と認定するのは難しい。

その他、④「かか」は、奈良時代では鶯の鳴き声であるのに対し、平安時代の「かか」は、カラスの鳴き声であり、意味が異なっている。また、奈良時代の⑨「つらつら」は、熟視する様子を表す。現代語で言えば「じっくり」「しみじみ」に該当しそうな意味である。一方、平安時代の「つらつら」は、血が滴り落ちる様子や長々と愚痴をこぼす様子の意味する。現代語で言えば「たらたら」がしっくりするような意味である。両時代の「つらつら」は意味上、共通性がないのである。

こんなふうに奈良時代の擬音語・擬態語と同じ語形が平安時代に見られても、意味が全く異なり、共通性が見出せない場合は、継承された語とは認められまい。逆に、語形が少々異なっても、意味が共通し、語誌が迎れる場合は、継承されたとみなしてもよからう。たとえば、奈良時代の⑦「くるる」、⑭「しほほ」、⑮「はらら」など

にかかりたいあなたですよ」といった意味。奈良時代の「うつらうつら」は、鮮明に見える様子を表す。現代語の「はっきり」という語がぴったりするような意味である。

平安時代の初めに出来た『土佐日記』にも、「うつらうつら」が出現する。「目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つけ」（承平五年二月五日）のように。鏡を海に沈めると、荒れ狂っていた海がうそのように凪いだ。それを見て、『土佐日記』の作者は「海神の欲張りな本心を目の当たりにしてしまった」と述べている箇所である。「うつらうつら」は、目にはっきりと見える様子を意味する。

奈良時代の「うつらうつら」と同じ意味であるから、平安時代までは確実に系譜が辿れる。けれども、平安時代も末期になると、もはや「うつらうつら」の意味がわからなくなっている。その頃成立した『袖中抄』では、「うつらうつら」を「つらつら」と同じか、などと記しているからである。平安時代で命の尽きてしまった擬態語とみるべきであろう。現在の、意識のおぼろげな様子を意味する「うつらうつら」は、後の時代に発生した別語と考えるのが自然である。

もう一例あげてみよう。⑥「ゆくゆく」という擬態語は、次のように用いられている。

丹生の川 瀬は渡らずて ゆくゆくと 恋痛し我が背 いて通
ひ来ね (万葉集、一三〇)

長皇子が弟に送った歌である。「丹生の川の瀬は渡らないで、ずんずんと通ってきておくれ、恋しくてならない弟よ」といった意味。平安時代の「ゆくゆく」も勢い良く進んで行く様子を表し、継承されている。だが、現在には存在しないので、後に廃れてしまったことは確かである。その他の語も同様である。

七 現代まで生き延びた語

二つ目の場合には、どんな語があるのか。平安時代のみならず、現代まで生き延びた語である。次に示すような、残りの十六種類の語である。

①「い」「い」③「うらうら」「い」⑦「くるる」「い」⑫「こむ」「い」⑭「ころころ」⑯「さや」「い」⑰「さやさや」「い」⑱「まらまら」「い」⑲「さわさわ」「い」⑳「すくすく」「い」㉑「そよ」「い」㉒「たわたわ」「い」㉓「はらら」「い」㉔「し」「い」㉕「ぶ」「い」㉖「ふつ」。

馬の声①「い」と、蜂の羽音②「ぶ」は、次の歌にみられる。

たらちねの 母が飼ふ蚕の 繭隠り いぶせくもあるか(馬声)
蜂音石花蜘蛛荒鹿(妹)に逢はずして (万葉集、二九九一)

「母が飼っている蚕が繭ごもりするように、ああ心が晴れない、

あの娘に逢わずにいるから」といった意味。「いぶせし」という語の「い」と「ぶ」を表すために使われた「馬声」と「蜂音」である。当時は、馬の鳴き声を「い」と聞き、蜂の羽音を「ぶ」と聞いていたから成り立つウィットに富む表記法。「戯書」とも言われる。

①「い」は、当時の馬の鳴き声であるが、実は「ん」の音を表記する方法がないから記していないだけで、実際の発音は「ɛ」であった可能性もある。平安時代では、馬の鳴き声を「いう」と書いていた。前に列挙した平安時代の擬音語・擬態語の二番目にある「いと」が馬の声である。平安時代も末期に至るまで「ん」音の表記法が確定しておらず、「う」の文字で表わすこともある。「いう」の表記も、実際の発音は「ɛ」であった可能性が濃厚である。こうして、平安時代には確実に奈良時代の馬のいななきは継承されている。のみならず、現在の馬の声「ひん」に連なっていると考えてもよからう。「ん」から「hin」への変化はあまり大きくはなく、一つながりの系譜と見られるからである。³⁾

蜂の羽音⑨「ぶ」も、平安時代の列挙した語の「ぶぶ」という蜂の羽音に継承されている。そればかりではなく、現在でも蜂の羽音は「ぶんぶん」であり、現代まで継承されていると見てもよい。

⑫「こむ」という奈良時代の狐の声も、平安時代の狐の声「こうこう」に連なるのみならず、現在の「こんこん」に継承されている。

さす鍋なべに 湯沸わかせ子ども 櫛津いぢづの 檜橋ひげしより来こむ 狐きつねに浴あむ
さむ (万葉集、三八二四)

「注ぎ口のある鍋に湯を沸かせ、皆のものよ、櫛津の檜橋からコンと鳴いてやってくる狐に浴びせてやるう」と言った意味。ちょっと残酷に見える歌であるが、次のような事情を考慮すると、残酷さがぐっと薄らぐ。宴会をしていると、狐の声がした。そこで、目の前にある鍋、狐の声、河の橋などを関連させた歌を作れと言われて、作った歌だったのである。既に述べたように、奈良時代は「ん」の音の表記がまだ確定していないために「む」で記している可能性がある。実際の発音は[komn]か、あるいはそれに近い[kon]であったと考えられる。平安時代の狐の声「こうこう」も、実際の発音は現代の「こんこん」に近いものであり、現在の狐声に直接連なっていくような言葉だったのである。⁴⁾

⑬「さやさや」は、奈良時代では次のように用いられている。

誉田ほむたの 日の御子ひのみこ 大雀おほささぎ 大雀 佩はかせる 太刀たち 本もと吊つるぎ
末振すゑふゆ 冬木ふゆきの 素幹すからが下木したきの さやさや (古事記、中巻)

「誉田の日の御子の腰につけている太刀は、本の方は紐で腰に吊り下がっていて、先の方は揺れている。冬木の葉が落ちた幹の下に生えている灌木のように、さやさやと音を立てて揺れている」といった意味。枝がこすれ合って出すさわやかな音である。平安時代の「さやさや」も、同じ意味で用いられており、それはさらに現在の「さやさや」に継承されている。

⑭「すすく」は、奈良時代では次のように用いられている。

ささなみ道を すくすくと 我がいませばや 木幡の道に 遇
はしし嬢子 (古事記、中巻)

「ささなみ道をすんずん私が歩いてゆくと、木幡の道で偶然出会った乙女」という意味。この乙女と出会って応神天皇は彼女と結婚する。「すくすく」は勢いよく進んでいく様子。平安時代の「すくすく」も、勢いよく成長する様子を表し、共通した意味を備えている。それは、現代の「すくすく」の系譜に連なる。

また、㉓「ふつ」は、次のように使用されている。

この時、痛く殺すと言へるは、今、伊多久の郷と謂ひ、臨に斬ると言へるは、今、布都奈の村と謂ひ、(常陸国風土記、行方郡)

常陸国の行方郡にある地名由来を語っている箇所。「布都奈」は、建借間の命が賊軍を刀剣で「ふつに」斬ったことから名づけられた地名。「ふつ」は、刀剣で勢いよく切り下ろす時の音もしくは様子である。平安時代の「ふつ」に継承されている。また、現代語の「ふつり」「ぶつり」は、この系統の語である。

最後にもう一例。㉔「ひし」は、次の歌に見られる。

あかねさす 昼はしみにらに ぬばたまの 夜はすがらに この
床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも (万葉集、三二七〇)

激しく恋し、嫉妬心に駆られて嘆く女心を詠んだ長歌の一部。「昼もずつと、夜もずつと恋い焦がれ、この床がびしつとなるほどため息をついたことだよ」といった意味。「ひし」は、床の鳴る音で、平安時代の列挙した語の「ひしひし」に継承されている。さらに、現在の「びしっ」との関係が認められる。

残りの九種類の語も同じようにして、平安時代のみならず、現代にも受け継がれている命の長い語である。いずれも、表されている声や音や様子は、何時の時代にも存在する普遍的な性格を持ったものである。こうした擬音語・擬態語は、既に述べたように、合計十六種類。奈良時代には六十五種類の擬音語・擬態語が見られたわけだから、その残存率は、約二十五%。つまり、奈良時代の擬音語・擬態語の二割五分は、一三〇〇年以上の歴史を生き抜いてきていることが明らかになる。

私は、かつて感覚語彙(II)いたい・だるい・ねむいなどの感覚を表す語彙)や感情語彙(II)うれしい・かなしい・さびしいなどの感情を表す語彙)について、奈良時代語の現代語への残存率を調査したことがある。それによると、奈良時代の感覚語彙は約七十六%が現代まで継承されており、残存率はきわめて高かった。変化しにくいのである。一方、感情語彙の方は、奈良時代のそれが現在にまで継承されている比率は、四十九%であった。感覚語彙よりは変化しやすい語彙なのである。それらに対して、擬音語・擬態語は、二十%であるから、残存率は確かに少ない。しかし、生まれてはすぐ消えると言われる擬音語・擬態語なのに、長寿の語が存在すること

は記憶されるべきであろう。

八 奈良時代特有の擬音語・擬態語の特色

では、平安時代に継承されなかった擬音語・擬態語に注目してみよう。どんな性質を持った語なのか？

次に例示するような平安時代では別の言い方をするという場合を除く。たとえば、鹿の声。奈良時代では、次のように㊦「ひひ」と聞いている。

一 鹿ひつこのしかこの丘をかに走り登りて鳴く。その声ひひといひき。故かれ、
日岡ひまかと号なうく。(播磨国風土記、賀古の郡)

日岡という地名は鹿が「ひひ」と鳴いたことよって名づけられたという地名由来を説いた箇所。鹿の鳴き声は「ひひ」。平安時代になると、鹿の声として「ひひ」の語は見られず、「かひよ」と写した例が見られる。こういうふうには、平安時代では別の語で表すという場合は除き、ここでは、奈良時代だけに見られる擬音語・擬態語に注目する。すると、以下に述べていくような奈良時代の三つの顕著な特色が浮かび上がってくる。

一、野外で聞く動物の声

まず第一に、野外で聞く動物の声が目立つことである。ホトトギ

スの声やカエルの声やサル声など、大自然の中で耳にしたものを写し取っていることである。

たとえば、ホトトギスの声㊦「ときすぎにけり」。これは、ホトトギスの鳴き声「オッキョ、キョキョキョキョキョ」などと写せる声を「ときすぎにけり」と聞きなしたものである。「聞きなし」というのは、私たちが普段使っている言葉に当てはめて、動物たちの声を写す場合である。掛詞になった擬音語と考えれば、理解しやすい。たとえば、「ほーほけきょー」というウグイスの鳴き声を「法・法華経」という意味の言葉に聞くといった場合をさす。奈良時代のホトトギスの声は、次の歌にみられる。

信濃なる 須すが我の荒野に ほとときす 鳴く声聞けば 時ときすぎにけり (万葉集、三三五二)

「信濃の須我の荒れ野で、ホトトギスの鳴く声をきくと、『ときすぎにけり』と言ってるなあ」といった意味の歌。「ときすぎにけり」が、ホトトギスの鳴き声をうつした言葉であることは、長い間気付かれなかった。単に「ああ、時機がすぎてしまったなあ」という作者の感動を表す言葉だと考えられてきたのである。だから、何の時が過ぎてしまったのか問題になり、さまざまの説が出されていた。^⑤
ところが、後藤利雄「東歌を見直す」^⑥が、「ときすぎにけり」は、ホトトギスの鳴き声をうつした言葉であることを指摘した。確かにホトトギスの声は「ときすぎにけり」としてみると、実際の鳴き

声のリズムとびったり合って、そう聞こえる。現代のホトトギスの声の聞きなしは、「てっぺんかけたか」「ときよきよかきよく」が有名だが、カ行音とタ行音を基調にしている。「ときすぎにけり」も、カ(ガ)行音とタ行音を基調にしており、共通している。ホトトギスの声を写した言葉であるという説は、間違いあるまい。ここで、注目したいのは、ホトトギスの声を聞いている場所である。作者は信濃の須我の荒野でホトトギスの声を耳にしている。大自然の中に身を置いているときに聞こえたホトトギスの声である。

カエルの声⑤「かくしもがも」は、次の歌にみられる。カエルのことは、歌の世界では「かはづ」という。

我がわたが豊あは 三重みへの川原かはらの 磯いその裏うらに かくしもがもと 鳴くかはづ
づかも (万葉集、一七三五)

「三重の川原の岩陰で、『こうした状態ですつといたい』と鳴くカエルであるよ」という意味。「かくしもがも」は、カエルに感情移入した作者の心情表現であることは間違いない。のみならず、カエルの鳴き声をそう聞きなした言葉ととるべきではあるまいか。われわれの知っているカエルの声は、どれもお世辞にも美声とは言いがたいが、調べてみると、「こうした状態ですつといたい」と思わせるような美声のカエルがいる。それは、カジカガエル。その声は、他のカエルとは似ても似つかぬ澄んだ声である。現在、天然記念物に指定されていて清流にしか生息しないが、その声は、リーリーリー

と規則的なリズムを持ち、小鳥のさえずりや秋の虫の鳴き声をおわせる。その美声を「かくしもがも」と聞きなしたところに、この歌の面白さがあると考えるべきではないか。コオロギの鳴き声「り・り・り・り・り……」を「針させ、綴りさせ、針なきや、借りてさせ」と聞きなすように。そして注意してほしいのは、この声を耳にしている場所である。作者は、三重の川原の岩陰にいる。そうした野外に出ていて耳にしたカジカガエルの声である。

猿さるの声⑩「こ」は、次のように用いられている。

郡こほりより西北にしきたのかた六里むさに、河内かふちの里さとあり。古々ここの邑むらと名なづく。
俗くじひとの説ことばに、猿さるの声を謂いひてここと為なす。(常陸国風土記、久慈の郡)

「古々の村」という地名は、猿が「こ」と鳴くところから名づけられたという地名由来を記した箇所。猿の声には十数種類のパターンがあるが、「こーこー」という声をあげるのは大自然の懐に抱かれ、エサを食べて満足している時である。野外にいるサルたちが自由にエサにありつき、「こーこー」と鳴き声をあげているのを、奈良時代の人々は耳にしているのである。彼らは、そうした大自然の中にいる猿の声を直接耳にするほど、野外に出ていたということである。

また、野外であることを表す音や様子を写した擬音語・擬態語もある。たとえば、茅かやの風に鳴る音⑭「そそ」。

詰たびて曰のたまはく「倭やまとは こそ茅原ちのち 浅茅原あさちのち 弟日おとひ 僕やつらま 是こゝなり」とのたまふ。(日本書紀、卷一五)

身をやつしていた顕宗天皇が、宴席で自分の身分を高らかに宣言した箇所である。「倭やまとは、そよそよと首を立てる茅原、その浅茅原である倭の弟王であるぞ、私は」と。「こそ」は、茅のそよそよ鳴る音。一面に茅の広がる野原を目にしたときの擬音語である。また、既に引用した⑤⑥「ほらほら」と②⑨「すぶすぶ」も、野外での地形の特色を捉えた擬態語である。

こんなふうには、野外で聞いたことの明らかな動物の鳴き声や物音を写す擬音語や野外での様子を写す擬態語が見られることに、奈良時代の特色がある。平安時代でも、鶯の声や雁の声、コオロギの声を耳にし、「ひとくひとく」「かりかり」「つづりさせ」などと写しているが、それらの声の多くは、屋内や人家の近くで聞いている。壮大な大自然の中に自ら身をおいたときに聞いたものではない。奈良時代にのみ見られる擬音語・擬態語は、当時の人々が野外での活動を日常的に行っていたことを明らかにしてくれる。

二、ダイナミックな動作音や様子

第二に、奈良時代に存在する擬音語・擬態語にはダイナミックな動作音や様子が見られることである。

⑤⑥「もそろもそろ」は、次のような場面で用いられている。

霜しも黒葛くろくわ閣かくや閣かくやに、河船かはふねのもそろもそろに、国来くにこ国来くにこと引き来き縫ぬへる国は、(出雲国風土記、意字の郡)

「霜にあつて黒くなった葛を手繰り寄せ手繰り寄せ、河船のようにそろりそろりと、『土地よ来い、土地よ来い』と引いて来て縫い付けられた国は」という意味である。『出雲風土記』に繰り返し四回も見られる。「もそろ」は、別稿で詳しく述べる予定であるが、擬態語「そろ」に接頭辞「も」を付して出来た語と考えられる。⑤⑥「もゆら」の「も」と同じく強調の接頭辞である。大船をそろりそろりと引き寄せるように、大地をゆっくりと引き寄せる様子を表す擬態語。スケールの大きい共同作業的な営みがとらえられている擬態語である。

⑦「つばらつばら」には、次のように用いられたものがある。

朝開あさひらき 入江いりえ漕こぐなる 梶かぢの音ね つばらつばらに 我家わがへし思おもほゆ (万葉集、四〇六五)

「朝早く船出して入り江を漕いでいる梶の音のように、しみじみと我が家が思い出される」といった意味の歌。「つばらつばら」は、しみじみという意味を持つ擬態語であるが、梶の音を写した擬音語でもあると見るべきであろう。さもないければ、「梶の音」が「つばらつばら」という言葉を引き出しにくいからである。舟を漕ぐ櫓のきしる音が、夜明けのしじまの中に広がってゆく。「つばらつばら」

も、人々の舟を漕ぐ動作まで見える躍動的な音である。

また、㉞「つらら」は、次のように使われている。

わたつみの 沖辺を見れば いざりする 海人の娘子は 小舟
 乗り つららに浮けり (万葉集、三四二七)

大海原を大船に乗って出航するときに見えた様子を詠んだ長歌の一部。「海原の沖の辺りをみると、漁火で魚を捕る海人乙女たちが小舟に乗り、点々と連なって浮かんでいる」という意味。「つらら」は、真つ黒な夜の海で漁をする海人乙女たちの小舟の明かりが点々と連なっている様子を表す擬態語。以上は、いずれも海や川で共同作業をしているときに出る音や様子である。

㉞「ゑらゑら」も、人々の上機嫌に笑いさざめく声や様子を写している。

もののふの 八十伴の緒の 島山に 赤る橘 うずに刺し
 紐解き放けて 千年寿き 寿きとよもし ゑらゑらに 仕へ奉
 るを 見るが貴さ (万葉集、四二六六)

天皇の催す祝宴で詠んだ長歌の一部。「もろもろの官人たちが、庭の山に赤く色づいた橘を飾りに挿し、衣の紐を解きくつろいで、永久の長寿を祝い、寿きさざめき、にこにこ笑ってお仕える様子を拝するめでたさよ」といった意味。当時の人々の笑顔が見え、

笑い声が聞こえてきそうな生活感溢れる言葉である。

㉞「たしだし」は、霰の降る音であるが、人々が次々に去っていく音をも暗示しているように思われる。

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆ
 とも 愛しと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝
 しさ寝てば (古事記、下巻)

軽皇子が妹の軽大郎女と姦通した後、歌った歌。姦通罪を犯してしまったからには家臣たちがどンドン離れていっても仕方がない、もうどうなっても構わないと、軽皇子は深く歌っている。「たしだし」は、霰が笹の葉を豪快に打つ音を表す。「確か」の意味を持った「たし」の語が掛けられ、「確かに愛する人と共寝したからには」と見るのが一般的である。しかし、「たしだし」は、「離ゆ」にも掛かると見るべきではないか。人々が足音高く軽皇子の元を離れていく音を象徴する擬音語とも取るべきではあるまいか。いずれにしても、波乱に富んだダイナミックな音を表している。

また、単体の神や人がたてる音も大きくあげひろげである。たとえば、㉞「ほろ」は、次のように用いられている。

天雲を ほろに踏みあだし 鳴る神も 今日にまさりて 恐れ
 めやも (万葉集、四二三五)

「天にある雲をばらばらに蹴散らして鳴る雷も、今日にまさって恐れることがありますよか」といった意味。天皇・皇后から親愛の気持ちのこもった言葉をかけられて、雷を恐れる以上に驚懼している気持ちを詠んだもの。「ほろ」は、雷が雲をばらばらに蹴散らす様子を表しているが、なんとダイナミックな動作であることか。

また、④「とど」は、次のように使われている。

馬の音の とどともすれば 松陰に 出でてそ見つる けだし
 君かと (万葉集、二六五三)

「馬の足音がどんとどんと響くので、松陰にそっと出てみた、もしやあなたがおいでになったのかと思って」という意味。「とど」は、馬の足音を写す擬音語。男性が女性のところに訪れる時に乗る馬の足音があたりに響き渡る。馬の足の動きまで見えてきそうな躍動的な動作音である。「とど」は、人間が板戸をどんとどんと叩く音をも表す。どちらも活力溢れる音である。

⑩「こ」も、当時の人間の生活を映し出す擬音語である。

香島根の 机の島の しただみを い拾ひ持ち来て 石もち
 つつき破り 速川に 洗ひ濯ぎ 辛塩に こごと揉み (万葉集、三八八〇)

「香島根の机の島の巻貝を拾い採って来て石で殻を割り、速川で

洗い清め、辛塩でこしこしと揉み」という歌。「こ」は、貝の身を辛塩でこしこしと揉む音。塩揉みでいい味が出てくるのであろう。生き生きした生活音である。

⑤「びしびし」もまた、奈良時代人のたてる人間的な音である。

糟湯酒 うちすすろひて 咳ぶかひ 鼻びしびしに しかとあ
 らぬ 鬚かき撫でて (万葉集、八九二)

山上憶良の有名な「貧窮問答歌」の一部。「糟湯酒をちびちびすすって、咳き込み、鼻水をずるずる吸り、ろくに生えてもいない鬚をかきなでて」といった意味。「びしびし」は、鼻水をすすり上げる音を表す擬音語である。

この他、鏝に鍵がぶつかって立てる音⑥「かわら」もある。いずれも、奈良時代の人々の生活を髣髴とさせる音や様子。そして、これらのダイナミックな動作音や様子は、奈良時代ならではのものがある。

三、鈴や玉などの鳴る音

第三に、奈良時代には、小鈴の鳴る音や玉の触れ合う音がしばしば見られるという特色である。たとえば、⑮「ゆら」は、次のように用いられている。

秋のもみち葉 巻き持てる 小鈴もゆらに たわやめに 我は

あれども 引き攀ちて (万葉集、三三三三)

「秋の紅葉を、手に巻いた小鈴をちんと鳴らして、女だてらに引きつかんで」折り取ってという文脈。「ゆら」は、女性が手に巻いている小鈴の鳴る音を表している。現在なら、「ちん」とか「りん」で表すような音を「ゆら」が表している。「ゆら」や、以下にあげる⑥④「ゆらら」⑥⑤「もゆら」は、現代語「ゆらゆら」から連想される意味とは全く違って、小鈴の鳴る音や玉の触れ合う音などをあらわす擬音語である。奈良時代には「ゆら」からできた動詞「ゆらく」があり、釣鐘型の楽器がさわやかに鳴り響くことを表していることから、「ゆら」が音を表す言葉であることが証拠立てられる。

⑥④「ゆらら」は、次のように用いられている。

阿胡あこの海の 荒磯あらいその上に 浜菜あま摘む 海人あまをとめ娘子とめらが うながせる 領布ひれも照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白たへの袖振る見えつ (万葉集、三三四三)

「阿胡の海の荒磯のほとりて海人乙女らが海藻を採っている。彼女たちが首にかけている領布も輝くばかりに、手に巻いている玉もちんちん音を立てるほどに、白布の袖を振っているのが、私に見えた」という意味。「ゆらら」は、「ちんちん」とか「りんりん」のような、手に巻いている玉が揺れて鳴る音を表している。

鈴には呪術的な意味がある。今でも神社の拜殿には大きな鈴が吊

り下げられ、参拝する時にはそれを鳴らしておまいりをするところも想像できよう。そうした元々は呪術的な意味のある鈴ではあるが、現実には蛇や熊といった動物避けになるといった実用的な役目もあつたと察せられる。奈良時代の女性たちは、鈴を手首に巻き、「ゆら」「ゆらら」と音を出し、身を守る術にしていたことが明らかになる。

女性ばかりではなく、男性も首飾りをし、鈴を手首にしている。⑥⑤「もゆら」は、次のように使われている。

其その御頸珠みくびたまの玉たまの緒を、もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて (古事記、上巻)

「イザナキノミコトは」首飾りの玉の緒を取り、ちりりと音をさせて、天照大御神にお授けになり」という意味。イザナキノミコトは、いうまでもなく男神。「もゆら」は、「ゆら」という擬音語に強調の意味を持った接頭辞「も」を付けて出来た語である。装身具にした首飾りを鳴らす音である。神の行う仕草であるから、呪術的な意味があつたのである。

また、男性は、レクリエーションである鷹狩りでも、わざわざ小鈴を「ゆら」と鳴らしている。

秋あき付けば 萩はぎ咲きにほふ 石瀬野いしせのに 馬うまだき行きて をちこちに 鳥踏とりふみみ立て 白塗しろぬりの小鈴こすずもゆらに あはせ遣り 振り放

け見つつ 憤るいもほ 心の内を 思ひ延べ (万葉集、四一五四)

越中に赴任した大伴家持が、鷹狩りで所在無さを紛らわせていることを歌った長歌の部分。「秋になると、萩の咲きにおう石瀬野に、馬を進めてあちこちの茂みから鳥を追い出し、銀色の小鈴もちゃんと鳴らし合わせて追いやり、振り仰ぎ見ては悶々の心の内を紛らわせ」といった意味である。小鈴を鳴らす音が「ゆら」である。当時の人々は、おしなべて、「ゆら」「ゆらら」「もゆら」と音の出る鈴や首飾りを身に付け、それを鳴らして行動している。

九 おわりに

奈良時代の擬音語・擬態語を残存する作品から抽出してみると、六十五種類のものがあげられた。そのうちの二割五分は、なんと一三〇〇年の命を生き延び、現在でも活躍している。「うらうら」「さやさや」「さらさら」「さわさわ」「すすすく」「そよ」など。それらは、いずれもどの時代にも必要な音や様子を表す言葉である。

一方、奈良時代だけに見られる擬音語・擬態語を検討してみると、奈良時代人の生活や風習が浮き彫りになってきた。「ときすぎにけり」「かくしもがも」「ここ」などと、ホトトギス・カエル・サルの鳴き声を写す擬音語が見られるが、それらは自らが野外に身を置いた時に耳にした鳴き声を写し取ったものである。「そそ」「ほらほら」「すぶすぶ」も、野外で感じる音や様子である。奈良時代の人が野

外にしばしば出向き、自然と共に生活していることがよくわかる。

また、大船を皆で引く様子を表す「もそろもそろ」、舟を漕ぐときの梶の音「つばらつばら」、小舟を連ねている様子「つらら」は、奈良時代の人々が海や川で共同作業をしている姿を浮き彫りにする。また、人々は「あらあら」と笑いさざめき、「たしだし」と音を立てて逃げ出す。集団的な行動を鮮烈に浮かび上がらせる擬音語・擬態語である。

さらに、雷神も、人間と同じように「ほろ」と蹴飛ばす行為をし、人は馬に乗って「とど」と音を立て、板戸を「とど」と叩き、巻貝を辛塩で「ここ」と揉み洗いをして食べ、鼻水を「びしびし」とすすり上げている。いずれも、奈良時代の人々が躍動的な動作をしていた事実を鮮明にする。

また、女性たちは、平素から呪術的な意味と実用的な意味を持った小鈴を手に巻き、「ゆら」「ゆらら」と音を出している。男性も鷹狩りで小鈴を「ゆら」と鳴らして獲物を追い立てている。男神も、首飾りの玉を揺らして「もゆら」と音を立てて、呪術的な意味を持たせている。

こんなふうに、奈良時代だけに見られる擬音語・擬態語を追究すると、当時の人々の生活ぶりが具体的に明かされて行く。彼らは、野外でダイナミックに動き回っていたのである。

残された課題もある。以上に採り上げなかった擬音語・擬態語の特性分析がまだ十分でないことである。たとえば、㊦「はだら」という擬態語がある。

夜を寒み 朝戸を開き 出で見れば 庭もはだらに み雪降り
たり (万葉集、一三二八)

「夜が寒いので、朝戸を開けて出てみると、庭にうっすらと雪が降っている！」という意味。うっすらと積もっている新鮮な雪を見て作者が歌わずにはいられなかった感動が伝わってくる。奈良時代では、こんなふうにはいられなかった感動が伝わってくる。奈良時代で見られるのだが、これが何を意味しているのが現時点では明らかにかにすることができなかった。平安時代になると、うっすら積もった雪に感動している様子は見られない。むしろ、一面に雪の降りしきったり降り積もったりする様子に感動している。消えずに残っている雪に対しては、もっと降って一面の銀世界になることを望んでいる。現代人の感覚に近いのである。

奈良時代のうっすら積もる雪にたいする擬態語の存在は、平安時代以後の人間たちとの美意識の違いを表すのかもしれないが、定かではない。さらに細かく分け入った追究が必要である。

注

(1) 調査に用いた資料は、次の通りである。

古事記Ⅱ新編日本古典文学全集『古事記』、日本書紀Ⅱ新編日本古典文学全集『日本書紀①』『日本書紀②』『日本書紀③』、風土記Ⅱ新編日本古典文学全集『風土記』、万葉集Ⅱ新編日本古典文学全集『万葉集①』『万葉集②』『万葉集③』『万葉集④』。

(2) 調査に使った資料は、次の通りである。

竹取物語Ⅱ中田剛直著『竹取物語の研究』^{〔複製〕}、うつほ物語Ⅱ宇津保物語研究会編『宇津保物語』^{〔本文と索引〕}、落窪物語Ⅱ松尾聡・江口正弘編『落窪物語総索引』および日本古典文学大系『落窪物語』堤中納言物語、源氏物語Ⅱ池田亀鑑『源氏物語大成』、狭衣物語Ⅱ日本古典文学大系『狭衣物語』、浜松中納言物語Ⅱ池田利夫編『浜松中納言物語総索引』および日本古典文学大系『浜松中納言物語』^{〔本文と索引〕}、平中物語Ⅱ堤中納言物語Ⅱ鎌田広夫編『堤中納言物語総索引』および日本古典文学大系『落窪物語』^{〔本文と索引〕}、伊勢物語Ⅱ池田亀鑑・大津有一著『伊勢物語に就きての研究』^{〔複製〕}、大和物語Ⅱ塚原鉄雄・曾田文雄著『大和物語彙索引』および日本古典文学大系『竹取物語』伊勢物語Ⅱ大和物語、篁物語Ⅱ愛媛大学文学部国語国文学研究会編『篁物語総索引』、平中物語Ⅱ曾田文雄著『平中物語総索引』、土佐日記Ⅱ日本大学文学部国文学研究室『土佐日記総索引』、蜻蛉日記Ⅱ佐伯梅友・伊牟田経久編『かげろふ日記総索引』、和泉式部日記Ⅱ東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾共編『和泉式部日記総索引』、紫式部日記Ⅱ佐伯梅友監修『紫式部日記用語索引』および岩波文庫『紫式部日記』、更級日記Ⅱ東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾共編『更級日記総索引』、讃岐典侍日記Ⅱ今小路寛端・三谷幸子編著『校本讃岐典侍日記』、枕草子Ⅱ松村博司監修『枕草子総索引』、大鏡Ⅱ秋葉安太郎著『大鏡の研究』、古今和歌集Ⅱ西下経一・滝沢貞夫編『古今集総索引』および朝日古典全書『古今和歌集』、後撰和歌集Ⅱ大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』、拾遺和歌集Ⅱ古典文庫『拾遺和歌集』、三宝絵詞Ⅱ古典文庫『三宝絵詞』、今昔物語集Ⅱ日本古典文学大系『今昔物語集』、法華百座法談聞書抄Ⅱ佐藤亮雄校注『百座法談聞書抄』、打聞集Ⅱ複製本『打聞集』古典保存会、古本説話集Ⅱ岩波文庫『古本説話集』および複製本『梅沢本古本説話集』

- 貴重古典籍刊行会、類聚名義抄Ⅱ複製本『図書寮本類聚名義抄』および吉田金彦編『図書寮本類聚名義抄和訓索引』・正宗敦夫編『類聚名義抄』・色葉字類抄Ⅱ中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄』。
- (3) 山口仲美著『犬は「びよ」と鳴いていた——日本語は擬音語・擬態語が面白い——』（光文社、二〇〇二年八月）の第二部「イヒヒンヒンと笑って別れぬ」参照。
- (4) 山口仲美著『犬は「びよ」と鳴いていた——日本語は擬音語・擬態語が面白い——』（光文社、二〇〇二年八月）の第二部「われは狐ちゃこんこんくわいくわい」参照。
- (5) 山口仲美著『平安朝の言葉と文体』（風間書房、一九九八年六月）の「付編 感覚・感情語彙の歴史」参照。
- (6) どのような時が過ぎたのかに関する説は、次の通りである。(1)京都に帰るべき時：賀茂真淵『万葉考』・加藤千陸『万葉集略解』・鴻巣盛広『万葉集全釈』・武田祐吉『増訂万葉集全註釈』・伊藤博『万葉集私注』、(2)契った時：鹿持雅澄『万葉集古義』、(3)夫の帰ってくるべき時：井上通泰『万葉集新考』・新潮日本古典集成『万葉集四』、(4)行なわねばならぬ田の仕事（田植え）の時機：契沖『万葉代匠記』・折口信夫『万葉集総釈』・窪田空穂『万葉集評釈』、(5)会うべき時：土屋文明『万葉集私注』・室伏秀平『万葉東歌』・佐々木信綱『評釈万葉集』。
- (7) 後藤利雄著『東歌難歌考』（桜楓社、一九七五年十一月）所収。
- (8) 山口仲美著『ちんちん千鳥のなく声は——日本語の歴史 鳥声編』（講談社、二〇〇八年十一月）の「仏壇に本尊かけたか——ホトトギス——」参照。
- (9) 山口仲美著『新・にほんご紀行』（日経BP社、二〇〇八年三月）の第二部「オノマトベに遊ぶ」の「カエルの歌は濁音か？」参照。
- (10) 山口仲美著『言葉の探検』（小学館、一九九七年十一月）の第八章

「垣根をとって話してみたい」の「虫は針させ綴りさせ」の項参照。

(11) 山口仲美著『新・にほんご紀行』（日経BP社、二〇〇八年三月）の第二部「オノマトベに遊ぶ」の「猿は「ココ」と鳴いていた」参照。